助成番号

17 - A06

# 成果報告書

記入日 2023 年 10 月 10 日

フリガナ:(サカタシュン

氏 名:坂田舜

渡航先国名 トルコ共和国 留学先の所属機関:ボアジチ大学

帰国後の所属機関:九州大学

研究テーマ:トルコ近現代における「女性」の諸相 ―女性知識人の著作を中心に―

研究期間 : 2019年 4月~ 2021年 3月(2年 0ヶ月)

## 研究成果 (概要)

報告者は、トルコ近現代における国民形成の一端を明らかにするため、「女性」に着目して研究を進め、一部学会等で報告した。またその他雑誌・定期刊行物を収集し、新たな研究成果の報告を準備している段階である。

## 研究成果 (詳細)

### 1. 史料調査

近年史料のデジタル化が進みインターネット上でも史料収集ができるようになったとは言われるものの、実際のところは部分的にしかなされておらず、また場合によってはサーバー上で見られるはずのものがシステム上の問題によって公開されていないということがある。そこで報告者は現地、特にイスタンブルにあるベヤズィット図書館、アタテュルク図書館などで雑誌・新聞などの定期刊行物を調査した。ベヤズィット図書館はイスタンブル大学前、ベヤズィット広場の近くにある図書館であり、トルコ共和国期において出版された新聞が多々収蔵されている。ここではメジャーな全国紙から、マイナーな地方紙まで閲覧することが可能で、また自由に撮影することもできた。イスタンブルで雑誌・新聞史料を収集するならば、まず確認するべき図書館である。

アタテュルク図書館はタクシム広場近くにある図書館であり、上述の図書館では閲覧が難しかったものを確認するために利用した。また新聞史料に関して言えば、通常図書館においては一冊の本のように1年分を製本されて収蔵されることがあり、その際ページの端を揃えるためにカットされることがままあるが、ここでは一部の史資料は良くも悪くも製本されておらず紙の束として紐で閉じてあり、かえってそのためにその史料の本来のサイズが計測できたりするなどということがあった。閲覧・調査したものに関しては、イスタンブルなどの「中央」で発行されたものに比べ、著しく印刷や紙の質が劣り、またページ数も少ないことから、物質面や情報面での格差が見てとれた。

ただし調査の過程でいくつか問題もあった。例えば、史料を探し出すための検索システムが十分に整備されているとは言いがたい場合があり、エラーが出たりある時期からはそもそもアクセスできない(図書館司書に指摘しても1年以上整備されない状態が続く)ということがあげられる。図書館によっては登録データ自体にも誤字脱字があり、それを踏まえた上で検索しないと目当ての史料の存在にそもそも気がつけないといったような問題点もあった。これらは早急に解決されるべきであると感じた。

#### 2.学会報告

## 2-1.ギリシアでの報告



|地中海学会にて、会場

報告者は 2019 年 6 月にギリシアのクレタ島で開催され た地中海学会(The 22nd Annual Mediterranean Studies Association International Congress)において報告を行なっ た。そこではオスマン帝国末期からトルコ共和国初期にか けて活動したトルコ人女性活動家ネズィへ・ムヒッディンの 著作に関する報告を行なった。主な報告内容としては、以 下の通りとなる。彼女は女性誌『女性の道 Kadın Yolu』の 編集長になった。また、トルコ共和国で最初に設立された 女性組織であるトルコ女性協会を設立した。

特に、彼女の記事の中で「トルコ人女性 Türk Kadını」という言葉に注目した。彼女が「トルコ人女性」という言葉 を用いて主張している場合、多くの場合、この言葉は市民の意味として用いられている。一方、民族的なナショ ナリズムのニュアンスで「トルコ人女性」を使う例はほとんど見られなかった。市民的ナショナリズムを鼓舞して

女性の権利を主張したことは、彼女の言説の特徴の一 つであった。

また、学会では様々な地域から来た研究者たちと交 流を行うこともでき、さらには会場がクレタ島であったこ とから、歴史的建造物の見学なども行った。

## 2-2.日本中東学会報告

報告者はまた、2021年5月16日に、日本中東学会 第37回年次大会において、オンラインという形式で「オ ギリシア、クレタ島にて スマン帝国末期における諸民族女性観に関する考察」



というタイトルにて報告を行なった。帝国内にいたはずのトルコ人以外の民族の女性についてのイメージに関す る研究は存外少ないが、それについて検討を試みた。

この報告では、オスマン帝国末期において発行された女性雑誌『保護 Siyanet』において連載された「女性の 世界 Alem-i Nisvan』を本報告の分析の主軸とし、同時代の(トルコ人の男性側から見た)諸民族女性観を検討 した。

ハミトは自身をトルコ人と認識しつつもアルメニア人やラズ人などの知人を有し、トルコ人以外の民 族の女性の地位や歴史について語った。記事の構成としては概ね、まず言及対象の民族一般の歴史や社 会生活のあり方等について説明した後、当該民族の女性の地位について述べる、という形式であった。 また、アルメニア人やユダヤ人などの非ムスリム系の女性についての社会的地位については肯定的に評 価しつつ、一方でチェルケス人を例外としつつラズ人やアラブ人、クルド人などのムスリム系の女性の 社会的地位については概ね消極的な評価を行っていた。この著者については詳細が不明かつ、連載の内容 自体も短いものの、この論説は帝国における少数民族の女性を横断的に取り上げたという点において貴重で あり、当時のオスマン帝国における諸民族女性観を検討する際において有用な一事例となった。

#### 3. その他

その他にも知見を広げるために学会やシンポジウム等を聴きに行った。

例えば、2019 年 5 月にはイスタンブル・ビルギ大学で行われた世俗主義・政治と宗教についてのシンポジウムを聴きに行き、宗教史研究者イスマイル・カラ氏のようなかつて報告者がその論文から学んだ研究者たちの公演を聴いた。

また、2019 年 8 月 22 日にイスタンブル市チェクメキョイ地区にて開催された、オスマン帝国史研究者アイフェル・カラカヤ=スタンプ氏(ウィリアム・アンド・メアリー大学准教授)による研究講演会を、松下国際スカラシップ奨学生の成地草太氏とともに聴きにいった。会はカラカヤ氏の子息とその友人、そして師匠と思しき若い男性のバーラマ(民俗楽器・弦楽器)の演奏会から始まり、その後カラカヤ氏の研究講演が始まった。講演の内容は地方の私家文書を用いてオス講演会開始前



チェクメキョイ・ジェムエヴィにてカラカヤ氏 講演会開始前

マン帝国時代の地方におけるイスラム系少数派アレヴィーの実態の一端を明らかにしたものであり、成地氏の助けも借りつつ講演を理解した。また、会場が一般の講演ホールではなく、ジェムエヴィと呼ばれるイスラム系少数派アレヴィーの儀礼施設/文化施設であり、モスクやそれに関連してよく見られるタイプのイスラム文化とは異なる側面を見ることができた。

その他にも、2020 年 2 月 11 日にもボアジチ大学内で行われた、宗教学研究者のマーカス・ドレスラー氏による、アメリカにおけるイスラム系少数派アレヴィーとイスラム系神秘主義系信仰に関する講演会にも行った。いずれも、日本では聞けない議論を聞くことができたといえる。

その他の活動に関してだが、同時期、報告者以外にもイスタンブルには松下留学生が数名留学しており、彼ら彼女らと読書会・勉強会を行ったことがあげられる。内容としては各自が持ち寄った史資料を読むというものであった。報告者はベヤズィット図書館で入手した史料の読解を担当し、他の留学生からアドバイスを受けながら検討を行った。特に、オスマン帝国末期に発行された『保護 Siyanet』誌に連載されていた記事「女性の世界 Alem-i Nisvan」を読んだ。学会報告についての説明で上述したように、これはオスマン帝国領内における各諸民族の女性に焦点を当てた連載記事だったが、読書会ではその中の「チェルケス人女性」という記事を取り上げた。勉強会に出席していた同じ松下留学生である成地草太氏の専門が、オスマン帝国時代におけるムスリム系難民であり、また特にチェルケス系難民について知見を持っていることから、彼から史料読解についてのアドバイスのみならず、チェルケス人に関する知識も教えていただいた(成地氏の助けなしにトルコ共和国で研究活動を行うことは、不可能であったと言っても過言ではないだろう)。

もちろんトルコ共和国の大都市イスタンブルの街並みを歩くというある種の「フィールドワーク」を したことも忘れてはならない。歴史的建造物はもちろんのこと、道端の広告・張り紙・落書き(日本に 比べて、トルコでは人々による道端での「表現」が多くなされる)などすぐに撤去されるがしかし間違 いなく歴史のある側面を映し出したといえる事物を記録・保存した。

#### 留学中の生活・研究でのトピックス

留学生活中、トルコ共和国史上、歴史的にのちに重要となるであろう事件に立ち会うことができた。 一つはイスタンブル市再市長選挙である。報告者は初めて海外の選挙戦を直接目にしたが、大音量で流 れる選挙ソングなどに見られるような日本とは異なるその文化的違いには驚かされた。開票日当日、飲 み屋に設置されたテレビに映った開票中継を、与野党の支持者を問わず、固唾を飲んで見守るイスタン ブル市民の姿からは、彼ら彼女らの民主主義に対する情熱が感じられた。

もう一つはアヤソフィアのモスク化とそれに伴うオープニングセレモニーである。イスタンブルの名



**2020 年 7** 月アヤソフィア前にて、モスク化オープニングセレ モニー

物観光地であるアヤソフィア博物館は、 2020年7月に正式にモスクになった(とはいえ、実は併設されていた小部屋がすでに礼拝所として使われていた)。

一般のトルコ市民からも、失速するトルコ経済へのめくらましだとする否定的意見から純粋にポジティブに喜ぶ肯定的意見まで見られた。セレモニーで見かけた「Türkiye(トルコ、の意)」と書かれた土産用の「トルコ帽」を自ら被り嬉々として礼拝を行ったとある男性の姿からは、

(歴史的実体としての多民族多宗教国家

であるオスマン帝国というよりは、自ら思い描いた理想の)「オスマン・トルコ帝国」の出現に喜びを隠せない様を見てとれた。また、灼熱の太陽が燦々と照っている中、そこに集まった人々の熱気と、「アッラーフ・アクバル」という男たちの怒号にも似た威勢のいい掛け声は、コロナ禍における彼らの鬱憤を晴らすかのような迫力があり、爆発する現代版トルコ・ナショナリズムの一端がそこに表出していた。

#### 今後の社会貢献

何よりもまず研究成果をまとめ、報告や論文の形にすることを目指す。報告者が関心をもつテーマは「トルコ近現代史」という言葉で表現されうるものだが、しかしトルコ近現代と一口に言っても、前身のオスマン帝国末期の歴史に関しては、日本には研究者が多く研究成果も充実しており、その帝国の多様な側面が明らかにされている。その一方で、トルコ共和国史については日本にも優れた研究者たちがいるとはいえ単純に数も少なく、そのような研究者たちも現代の政治分析に時間と成果が割かれているようであり、まだまだ充実させる余地があると感じられる。他領域・近接領域の研究者たちとも接触・協力しつつ、トルコ共和国の多様な顔を明らかにしたい。そしてできる限り読み手に届きうる媒体や言葉で記すことができれば、最も良いであろう。

それは単に個人の知的好奇心を満たすだけの行為にとどまらないことはもちろんのこと、トルコ共和国領内に暮らすさまざまな背景を持つ人々やその文化・歴史の理解へのきっかけとなり、市井の人々に成果の一部を還元することにもつながるだろう。また、報告者が現地でお世話になった多様な人々に対する一種の恩返しにもなるのではないだろうか。